『日本語学論集』第２０号　２０２４年３月

明治初期翻訳教科書の漢語
―川上冬崖『西画指南』『西画指南後編』を例に―

奥 山　光

1　はじめに

近代漢語研究は早くから盛んにおこなわれ、ごく近年では安部編著（2021）、田野村（2023）、張（2023）といった研究書が立て続けに出版され、一層の隆盛を見せている。

張（2023）では、これまでの近代漢語研究史が詳細に整理されており、近代漢語研究の資料として何が用いられてきたかという点についても詳細に検討が加えられている。そこでは、これまでの個別の語誌研究で取り上げられた漢語を①固有名詞、②具象概念、③自然科学を表す抽象概念、④人文科学を表す抽象概念に分類し、このうち、自然科学の抽象概念を表す個別の語誌研究資料として、蘭学関係資料や明治期の翻訳類資料が用いられてきたとまとめられている。また、張（2023）における資料の分類の中では、「啓蒙学者や知識人の手による英学を中心とする翻訳類」として、対訳辞書、翻訳書、専門用語集が挙げられている。

このうち、「翻訳書」に含まれると思われる資料群として「教科書」がある。安部編著（2021）では、次のように述べられている。

> 理科教科書類については、「日本教科書大系」のような大きな企画による活字本の刊行が、昭和中期に既に行われている。しかし、それらは、理科教育史、科学教育史を含む教育学・教育史の方面では広く活用されたのであろうが、日本語史資料としては、その成果を十分に生かしきってはいないように見える。（中略）教科書の数もかなり多いだけに、日本語学的な視点からのアプローチはまだ全体には及んでいないように思われる。

このような状況は、理科に限らず教科書資料一般についていえるだろう。明治初期の検定制度以前の教科書は海外の概説書等の対訳や抄訳が多く、また教育現場で用いられ、多くの学習者の目に触れたと考えられるという点からも、語誌研究に適した資料が多く存在するものと思われる。

そこで本稿では、筆者が取り組んでいる図学分野の教科書である『西画指南』および

『西画指南後編』を取り上げ、使用されている漢語を概観し、語誌研究の可能性を示す。これにより、近代漢語研究における教科書資料の有用性を裏付けるとともに、語誌研究の対象として興味深い語を見出すことを目的とする。

2　川上冬崖と『西画指南』について

川上冬崖（1827-81）は、幕末から明治にかけて活躍した洋画家で、江戸時代には蕃書調所で西洋画法を研究し、維新後は沼津兵学校、大学南校、陸軍士官学校で教鞭をとった。『西画指南』のほかには、『写景法範』や、『輿地誌略』の挿絵などで知られ、門下には高橋由一らがいる。

『西画指南』は、1871 年刊行の上下二巻本で、『西画指南後編』は 1875 年刊行の上下図から成る三巻本である。以下、本稿では便宜上 1871 年の『西画指南』を前編と呼ぶ。

前編は、1872 年の「小学教則」において罫画教科書として指定されている。凡例には、次のような記述がある。

（１）此書原本ハ千八百五十七年ノ鐫行英人ロベルト、スコットボルン氏ノ著ハセシ訓蒙ノ小冊子ニシテ毎条図ヲ附シ論ヲ挙タル画学書ナリ其一ハ線画ヨリ論ヲ起シ其二ハ輪郭及ヒ陰影ノ理ヲ説其三ハ照景法及ヒイソメトリカール其四ハ金属木版術等ノ事ヲ概論セリ（前編上凡２オ）

ここで原書として挙げられているのは Robert Scott Burn の *The Illustrated London Drawing-Book*（1856 年版では *The Illustrated Drawing-Book*）で、1852 年に初版、1853 年に第二版、1856 年に第三版・第四版が出版されているが、1857 年版は見つかっていないようである。金子（1992）がいうように、凡例の記述が正しければ五版かそれ以降の版を用いたと考えられる。向野（2022d）も 57 年版は未見であるとし、初版と第四版の序文が同一であることを指摘している。また、（１）に続いて後編の内容に言及している箇所がある。

（２）余嘗テ前書中ニ就テ線画及ヒ物類ノ写真陰陽法ノ部ヲ訳シ稿ヲ蔵スル年アリ今茲之レヲ本鬢ニ納レテ官刻ス唯恐ル看者其説ノ浅近ヲ訝ランコトヲ然レトモ次ヲ逐ヒ篇ヲ継テ猶高等ノ説ニ及フヘシ其照景法ノ如キハ別ニ蘭人著述ノ画学書ヲ訳セシ旧稿アレハ他日追刻シテ将此後篇ト為ントス（前編上凡２オ-凡３ウ）

原書の「其三」「照景法及ヒイソメトリカール」に当たる部分に記されている「照景法」について、「別の蘭書を訳した旧稿をのちに後編として刊行する」[1]としており、実際に 1875 年の後編はいわゆる透視図法の概説として最初期のものである。ただし、その原

[1] 向野（2022d）は（１）に見える原本の「其三」「其四」が『西画指南後編』で訳されているとしているが、これは誤りである。後編にはオランダ語の音訳がルビとして見られ、（２）の記述からも別の蘭書を訳していることは明らかである。また後編には「金属木版術」についての記述も見られない。

書は「蘭人著述ノ画学書」であることしかわかっておらず、原（1969）では「多くの舶載洋書とともに調所（開成所）」に所蔵されていたものであろう」と述べられている。

図学史や図学教育の立場から、図学用語の対訳の問題が取り上げられることはあった。たとえば「停点」について分析した原（1968）、「orthographical projection」の訳語について触れている角田（2017）などである。『西画指南』については、向野（2022a、2022b、2022c）において前編上の本文と *The Illustrated London Drawing-Book*（1853 年版）の原文、およびその現代語訳が対照されており、訳語についての言及もみられる。日本語学の分野では『西画指南』に注目した研究は見られず、近代漢語研究における用例の出典として「科学」という語について述べた田野村（2023）にみられる程度である。

3　漢語の選定基準

漢語の抽出に当たっては、前編上については奥山（2023）を用い、その他の巻は新たに国立国会図書館蔵本を底本としてテキストデータを作成した。漢語の選定基準は次の通りである。

・本文中にみられる二字以上の漢字表記語[2]のうち、すべての字が音読みであると思われるものを抽出した。
・読みの音訓については『日本国語大辞典（第二版）』（以下『日国』）の立項の有無や傍訓等を踏まえて筆者が判断した。そのため、実際には訓読みされた語が混ざっている可能性がある。
・音読みであると判断した二字漢語のうち、「二個」「数種」などの数量表現、「諸」「各」などの接頭語を含む語は除いた。ただし、『日国』に立項があり、かつ『日国』初例が 1720 年以降のものはこの限りではない。また、三字漢語については原則として、語構成にかかわらず採用した。四字漢語については、「自暴自棄」「一目瞭然」のように、現代において四字熟語として一般的と思われるものはそのまま採用したが、そうでないものは適宜二字漢語に分割した場合がある。
・本文中で定義されている専門語については、字数によらずそのまま採用した。

以上の処理により、異なり語数 1033 語を得た。これらを『日国』で引き、『西画指南』『西画指南後編』本文で用いられている意味での国内初例を確認し、①『日国』初例が 1720 年以前のもの、②『日国』初例が 1720 年以降で、かつ『西画指南』の刊行年（前編は 1871 年、後編は 1875 年）以前のもの、③『日国』初例が『西画指南』刊行年以降のもの、④『日国』に立項および対応する意味分類のないもの、の四つに分類し

[2] 本来は一字漢語についても見るべきであるが、本稿ではひとまず二字以上の漢語を対象とし、一字漢語や二字以上の漢語を構成する要素である語基（漢字形態素）については追って整理する。

た。『日国』に対応する意味分類があって用例が挙げられていないものは③に分類した。

なお、『日国』の初例だけをもって近代漢語であると断言することは当然できないが、近代漢語ではないもの（①）を仕分けることはできる。すなわち、②③④には近代に成立した語あるいは用法であると考えられるものが残るので、それらをさらに先行研究や各種辞書類、データベースによって調査することになる。

4　漢語一覧

前節の条件で抽出・分類した漢語を示す。

4.1　『日国』初例が 1720 年以前のもの

前編のみにみられる語

暗合	暗黒	暗処	以後	以前	異体	一毫	一度	一家	一区	一種	一掃	依頼
陰陽	有無	会得	遠景	蓊蔚	屋宇	外郭	改作	階梯	花卉	家具	学業	学者
学術	花瓶	下方	簡易	眼睛	岩石	間断	眼目	記臆	規矩	詭遇	記得	器物
宮殿	朽木	教化	凝滞	胸裏	漁家	居所	許多	伎倆	気力	奇麗	議論	口訣
口伝	訓蒙	経宿	景物	景色	結搆	研究	懸腕	交加	光景	広大	校定	後編
功用	後来	較量	毫厘	公論	箇々	古今	古蹟	刻苦	忽緒	根元	渾然	根本
差異	最下	細工	最後	再三	最上	細密	錯雑	差誤	左方	三階	山水	自家
時日	旨趣	自負	灑落	縦横	遒勁	従事	習熟	柔軟	樹間	手巾	熟視	熟覧
熟練	種々	手足	樹木	順次	順序	枝葉	捷径	瀟洒	成就	上部	上方	消滅
上面	初学	諸国	書籍	書中	所用	人家	真趣	迅速	人体	心通	人物	心目
随所	水上	水草	推知	随分	枢要	図上	正円	精神	整々	整斉	正中	生徒
精妙	説与	切要	説話	浅近	漸次	漸々	船尾	全面	麤悪	相応	造化	装飾
総体	増添	速成	塑像	疎密	麤漏	大黄	大厦	大概	大樹	大切	怠惰	大抵
怠慢	卓子	他日	多分	淡濃	地位	遅疑	逐一	躊躇	稠密	重複	眺望	著述
直下	知了	丁寧	手本	点画	添削	伝授	天真	顚倒	天然	田野	洞口	同様
努力	弐種	人形	忍冬	農家	濃淡	背後	白壁	発明	波濤	板行	反復	万物
半分	板面	煩労	秘訣	微細	彼此	美善	筆痕	必然	筆力	非難	比倫	蕪穢
風景	風車	不足	物象	物類	分析	奮発	分量	平日	平正	壁間	変化	勉強
偏曲	便利	勉励	崩壊	本形	漫然	未熟	妙処	無心	無量	明瞭	命令	綿密
毛筆	目撃	黙識	木版	木葉	模糊	摹写	勿論	門戸	幽微	有名	有用	油煙
容易	葉間	要用	乱雑	理会	六籍	利益	流水	柳葉	両肩	了知	林下	臨写

林鐘　練習　練磨　楼閣　驢馬　和漢　常春藤　不分明　自暴自棄

前編・後編に共通してみられる語

曖昧　一様　一箇　一方　一法　右方　遠近　円形　家屋　画稿　画師　画図　関係
規則　基本　曲直　屈曲　経過　形状　高上　高低　古昔　彩画　最初　左右　三角
四角　四隅　紙上　自然　次第　日月　実物　自得　四方　写真　自由　周囲　十分
上下　正面　尋常　真直　水面　精密　前後　全体　全備　想像　多少　中央　同一
燈火　同上　内外　廃棄　破風　反対　不正　別様　墨画　名目　文字　両端　輪郭
連続

後編のみにみられる語

椅子　一段　一倍　一面　一級　一個　一端　一点　移転　簷端　下位　階下　階級
階上　海水　回旋　回転　外辺　慣習　記載　棋子　机上　鏡中　禽獣　下巻　傑作
圏外　現在　見識　広狭　後篇　古来　根底　建立　最大　最末　採用　索捜　参考
散漫　施行　室内　集成　種類　墻垣　定規　上件　小堂　墻壁　照明　照耀　書記
書机　諸般　諸物　思慮　人身　水中　数多　寸尺　正対　世上　前篇　前面　増加
相互　捜索　相対　総論　大陰　対向　大小　大陽　地上　地方　中間　中分　頂上
長短　著明　通徹　丁字　通用　天井　透徹　同等　日下　日光　配列　平等　風濤
不定　不同　平均　平地　平分　別法　方法　洋中　欄干　裏面　両々

4.2　『日国』初例が 1720 年以降で、かつ『西画指南』の刊行年（前編は 1871 年、後編は 1875 年）以前のもの

前編のみにみられる語

暗記　暗室　一簇　一大　一階　一塊　一挙　一局　一層　意味　運筆　英人　円規
円壔　海綿　概論　画家　画学　各種　額面　画手　画匠　活用　花辨　官刻　簡単
器械　金属　結合　原本　高処　工拙　高等　後部　固著　細心　最善　最端　些々
雑草　写誤　熟考　熟思　樹葉　上唇　冗費　初歩　心手　進歩　西画　精工　正整
整然　西洋　石版　石板　石筆　拙劣　全局　洗浄　漸進　全図　渲染　蒼古　湊合
粗糙　村舎　大気　泰西　楕円　単一　段落　着実　彫工　天地　塗抹　内部　入用
廃船　白亜　必用　半体　描法　品物　分割　分賦　平衡　辨解　摩擦　木材　蘭人
留意　了解　練熟　連綴　臚列　想像力

前編・後編に共通してみられる語

位置　一線　画中　距離　光線　試験　習練　説示　全形　前章　側面　淡薄　注意
直線　通常　適宜　反射　描写　物体　平行　並列　方向　法方

後編のみにみられる語

暗体　安定　一辺　鋭角　円錐　円柱　縁辺　屋脊　開放　海面　画者　各個　漢画
貫通　含有　鏡面　近接　区別　経験　掲示　原論　考究　考思　後方　後面　集合
照映　墻上　上端　触線　諸件　人工　新婚　垂下　水平　精詳　接線　磚石　測量
短縮　築造　地平　中心　中点　注目　通過　適意　同形　塔上　突出　鈍角　半円
半圏　半径　比隣　物像　平滑　扁平　方形　方塔　名家　訳述　容光　類推　連接
一直線　　斜方形　十字形　楕円形　地平線　不透明　一目瞭然

4.3　『日国』初例が『西画指南』の刊行年（前編は 1871 年、後編は 1875 年）以降のもの

前編のみにみられる語

易々　一部　鉛筆　外囲　各処　画術　画線　画板　下辺　眼瞼　看者　顔料　起手
旧稿　胸像　教方　供用　軽視　軽侮　欠損　元形　撿査　後景　黒影　牛蒡　最良
竄奔　纂訳　施為　渋滞　樹幹　修業　熟成　手腕　真円　数種　贅語　整正　尖鋭
線画　全景　擦筆　足部　脱却　単純　単線　断々　断片　沈実　適合　添加　凸起
突起　内角　内郭　斑然　筆管　微妙　描線　部分　牧場　目標　豫言　略画　稜角
臨画　輪形　臨本　藝術者　小冊子　薔薇花　人物画

前編・後編に共通してみられる語

陰影　横線　下端　画幀　基礎　曲線　僅少　原因　尺度　斜線　前景　直角　同法
必要　表面　平行線　平常　密接　両側　幾何学　水平線

後編のみにみられる語

移動　映射　映像　延長　烟突　回行　角度　各物　角形　仮定　下面　間隔　眼線
曲面　結末　原画　交叉　光体　交点　弧線　四辺　釈義　写描　斜面　照射　消点
上辺　触点　諸点　心点　随意　垂線　垂直　数個　接点　線上　線端　全長　窓格
大画　多角　中景　頂点　直立　同高　等大　等同　平面　命名　立定　菱形　両分
円筒形　四角形　垂直線　対角線　多角形　中心点　長方形　同一点　透明体
二等分　八角形　六角形　直線距離

4.4　『日国』に立項がないもの

前編のみにみられる語

異線　一術　一鼻　引線　引了　映影　映鏡　翳遮　栄茂　円渾　遠枝　円線　滃暈
横形　外角　画勢　合輯　規本　旧墻　朽墨　橋辺　籗籃　近処　元画　勾郭　光処
合並　擦毀　試業　枝梢　枝状　弱腕　準守　推叩　図稿　精絶　贅線　正範　整密

浅易　渲暈　渲滃　全画　鐫行　線々　掃脱　側辺　側見　断株　単小　綻露　痴弱
頂端　追刻　点験　套方　濃黒　半形　反翻　筆画　怖意　噴口　包褁　墨気　本黌
溟滅　毛莨　羅織　涙孔　廉隅　一画科　一科学　映画鏡　円形状　画学書　鋸歯形
工匠学　三角状　斜行線　写真法　喞筒機　全直線　前同断　測量家　測量術
弾薬包　中央線　直角形　直下線　内外輪　二重線　半楕円　廉価物　肋状筋
四半円径　二重長角　反対凸凹

前編・後編に共通してみられる語

涵映　穹形　照景法　図中　側視　長角　長線　物形

後編のみにみられる語

引集　引長　右辺　運規　影映　映象　映点　簷線　烟楼　屋山　屋背　界墻　掛垂
快明　学画　角線　郭大　角点　画広　下趾　画式　下垂　冠縁　圜形　眼点　規脚
臼円　鏡底　圏形　光暉　交線　後地　戸障　戸上　雑線　左辺　尺法　斜勢　斜立
小画　墻角　縄線　墻門　垂縄　推転　推明　推用　図解　線下　尖体　磚縫　対景
多点　端線　中線　底線　適好　典形　骰子　頭線　同長　内彎　任定　燃点　半圜
班然　輻線　部内　分裁　分際　分点　壁底　辺線　辺底　方石　方磚　方稜　両脚
亮窓　量知　稜柱　遠近線　円柱形　画学校　角点線　画幀辺　画図術　棋子形
距離尺　距離線　距離点　距離法　光耀線　光耀体　最遠角　三角矩　四角塔
試験画　支柱墻　四半圜　四方形　試法用　写意画　斜縁辺　斜行辺　斜側面
周囲点　集合線　集合点　集頭点　上端圏　消滅点　垂線基　水平地　舌穹形
尖弧線　全正面　全側面　尖辨体　側面線　大縁辺　多角面　地平扁　中径線
頂上点　直八角　直角石　同距離　頭集点　内部分　日光線　半距離　半径線
平行圏　距離尺度　距離尺法　十字穹形　水平方形　第一人物　地平下点　地平上点
半直角　不光体　末横線　末分点　未定長　無光体　直角縁辺　直角三角　同脚三角
同側三角　特距離点　反射映照　斜行水平線　水平平行線　不同側三角

5　語誌の検討

4 節に掲げた語の中から二、三取り上げ、実際に簡単な語誌の検討を行う。

5.1　「尖体」「尖辨体」

「尖体」は『日国』に次のような立項がある。

（３）多くの動物の精子の頭部先端にみられ、一般に突起をなすもの。受精のさい卵に穴をあけるなどの働きをすると考えられる。＊解剖辞書〔１８７５〕〈金武良哲〉

「Corpus pyramidale 〈略〉尖体」

『西画指南』における「尖体」は、次のように異なる意味で用いられている。

（４）第二十四図　尖体是レ一箇ノ頂点ニ終ル三角形ヨリ成ル者ニシテ其根底ハ即チ多角ナリ（後篇上７ウ、**図１**参照）

図１からもわかるように、ここでの「尖体」は「角錐」を指している。

また、別の箇所には「尖辨体」という語も見られる。

（５）塔上ニ尖辨体（ピラミーテ）ノ屋山（左ルビ：ヤネ）ヲ覆フ説（後編上２１ウ、**図２**参照）

（６）方塔上ニ四個ノ方形尖辨体ヲモテ四隅ニ配列セル一個ノ八角尖辨体ヲ中心ニ置説（後編 29 ウ、**図３**参照）

図２および**図３**から、やはり「尖辨体」は角錐を指し、「方形」「八角」は底面の形を表していることがわかる。すなわち、「四角錐」「八角錐」ということである。

この語の国内での類例を調査したところ、早くは『舎密開宗』に一か所見られた。

（７）硫酸曹達ハ其晶八面柱（割書：第十四図嘴字ノ類）或ハ楔状尖瓣体（割書：尾字号類）（『舎密開宗』巻五２ウ、1837 年、**図４**参照[3]）

また、「尖瓣体」の定義を記した次のような例も見られた。

（８）三角面ノ其ノ角上ミ一点ニ聚ル者之ヲ尖瓣体ト謂フ[4]（『理学提要』首８オ、1856 年）

（９）四面体トハ三角四面ノ体ヲ云フ即三角ノ辺上ノ一点ニ聚ル者ナリ又コレヲ尖辨体ト云（『小学教授線形図解』３５ウ、1875 年）

「尖辨体」は上記のほかに数例見られるのみであったが、『舎密開宗』には次のような例が見られた。

（10）広義云燐酸ニ諳摸尼亜水ヲ和シ緩火ニ煮テ放冷シ晶ヲ結バシム晶形端正四面柱、両端四瓣尖体ヲ為シ（割書：）第十四図ノ心）（『舎密開宗』巻七・９オ、1837 年、**図５**参照）

（11）広義云消酸加爾基ハ六面柱、両端二長キ六瓣尖体アリ（割書：第十四図女）（『舎密開宗』巻八・１オ、1837 年、**図６**参照）

図５（心）の両端は四角錐、**図６**（女）の両端は六角錐である。辨ではなく瓣が用いられていることからもわかるように、花びらの先端が一点に集まったような図形を、その花びらの枚数と合わせて「〇瓣尖体」と呼んでいる。

「尖辨（瓣）体」「瓣尖体」といった語は、英華字典に由来するものとみられる。1822 年のモリソンの『英華字典』第三部の pyramid の項目には、次のようにある。

---

[3] ここでの「楔状尖瓣体」は角錐部分を持たず、直方体の両端に三角柱の側面を張り合わせたような形である。単に面が花びらのように集まってできた尖った形ということか。

[4] 原文は漢文であり、付された訓点により私に書き下した。

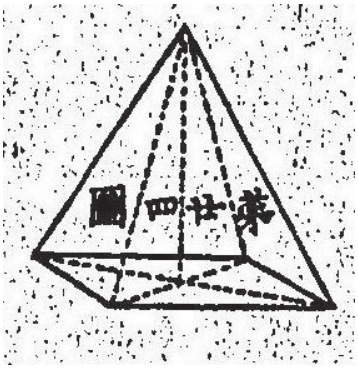

図１　後編図第一版第十四図

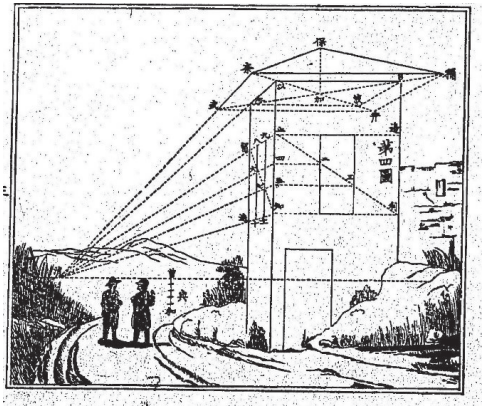

図２　後編図第五版第四図

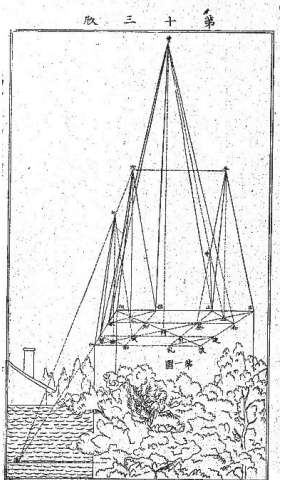

図３　後編図第十三版

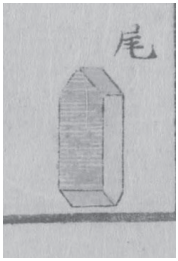

図４　第十四図　尾

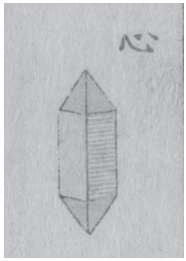

図５　第十四図　心

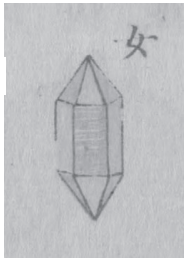

図６　第十四図　女

（12）PYRAMID, 尖瓣体 tsëën pan te.　Many sided pyramid, 衆瓣尖体 chung pan tsëen te.
Pyramid triangular, 三瓣尖体 san pan tsëen te

これを踏まえると、（５）において「ピラミーテ」というルビが見られる点は興味深い。冬崖がこの英華字典の系譜を引く辞書類を見た可能性がある。

このような「（〇瓣）尖体」あるいは「尖辨体」という語は、1880 年代を境に突如とし

て見られなくなる。当時は、同一の概念に対して複数の訳語が混在しており、これを統一しようという動きが高まっていた。『東洋学藝雑誌』第二十九号に記載されている「東京数学会社及工学協会聯合訳語会議決（第三）」を見ると、Pyramid は「角錐」と定められている。これによって、「(〇瓣）尖体」「尖辨体」は「角錐」に取って代わられ姿を消した。『西画指南』にみられたこれらの語は、明治初期ならではの多様な専門語の様相を反映した例であるといえよう。

5.2 「分際」

「分際」という語自体の成立は近代ではなく、鎌倉時代には用例が見られる。『日国』の記述を引用する（用例は一部を省略した）。

(13) ぶん-ざい 【分際】(「ぶんさい」とも)

①その人、その物それぞれに応じた程度。分斉。

＊名語記〔１２７５〕二「分際のほどをさしていへる義也」

＊日葡辞書〔１６０３～０４〕「Bunzai （ブンザイ)。キワヲ ワカツ。すなわち、ホドライ〈訳〉各人の能力、分量、部分、割合など」

＊大学要略〔１６３０〕上「『知』『定』『静』『安』『慮』『得』、この六字にて、我心我学の至りいたらざる分際（ブンザイ）をこころみるべし」

＊史記-儒林伝・序「明天人分際、通古今之義」

②身のほど。身分の程度。分限。分斉。

＊建武式目〔１３３６〕一三条「可専礼節事〈略〉凡上下各守分際、言行必可専礼儀乎」

＊清原国賢書写本荘子抄〔１５３０〕一「過高は其分才よりすぎたを云」

＊足利本論語抄〔１６Ｃ〕憲問第十四「伯寮が分才で天命をばゑはかるまいぞ」

＊浮世草子・日本永代蔵〔１６８８〕一・一「此仏に祈誓かけしは、其分際（ブンサイ）程に富るを願へり」

③分量。数量。

＊建武式目〔１３３６〕一〇条「仮令雖為百文之分際、為賄賂者、永不可被召仕其人」

＊太平記〔１４Ｃ後〕三六・秀詮兄弟討死事「爰にて敵の分際（ぶんサイ）を問ふに」

一方で、『西画指南』にみられる「分際」は次のようなものである。

(14) 地平線ヲ定ムル説　地平線ヲ定ムルヲ此術ノ基礎トス又之ヲ区別シテ二種トス一ヲ自然ノ地平線（左ルビ：ホライソン）ト云天ト海水ノ分際ノ一線ナリ一ヲ想像地

平線ト云人ノ思慮ヨリ定ムルモノナリ（後編上 13 オ）

「天と海水がちょうど分かれる際の部分」ということである。このような用法には、僅かながら類例も確認された。

（15）又人体ヲ解視スルニ或ハ稀ニ胃ノ上口ト下口トノ間ニ於テ微縊凹ノ痕アリ是即チ鳥類ノ如キ前胃ト肉胃トノ分際ナリ（『日講紀聞』巻五・６ウ- 7 オ、1870 年）

（16）信機ト熟セル言陳ハ、唯機ニツク信ニ非サレトモ、且機法ノ分際（左ルビ：ミツキハ）ヲ分タン為ニ、信ノ言ヲ機ニ属ス（『裁断申明書信順記』巻下・32 ウ、1883 年）

ただし、『日国』の（１）の用法が圧倒的に多く、上記のような用例は稀であった。

「二つのものが分かれている際」を表す語としては古くから「境界」などがあり、近代には次のように「境界線」という三字漢語も出現していたため、この意味での「分際」は淘汰されたものと推される。

（17）法全州を中断し之に一線を画し之を境界と定め今日まて其前後二分の地に在る処の二国の兵俱に此境界線を越ゆへからさる事（『法普戦争誌略』巻七・６ウ、1871 年）

「分際」のように、既存の意味ではなく、「分かれている際」というように文字通りの素朴な解釈して用いられる用法は、近代によくみられるように思われる。

6　おわりに

本稿では、『西画指南』『西画指南後編』にみられる漢語を整理し、同資料を近代漢語研究の資料として活用する試みとして、「尖体」「尖辨体」および「分際」について検討した。これらの語は、直感的に近代語らしいものを選定したにすぎないが、それぞれ「角錐」「境界線」といった同一概念を表す語との関係などから明治初期の漢語の多様性の一端を確認できた。今後は、本稿で整理した漢語リストを語誌研究の起点として本格的に活用していきたい。また、『西画指南』のテキストデータは前編上のみ公開していたが、本稿執筆に当たって作成した他の巻のデータについても、修正作業ののち公開する予定である。

参考文献

安部清哉編著（2021）『明治初期理科教科書の近代漢語―中川重麗『博物学階梯』にみる実態［影印・翻刻・索引付］』花鳥社.

奥山光（2023）『西画指南』上　テキストデータ Ver.0.1. https://researchmap.jp/hkr/works/42377801（2024 年 2 月 19 日最終閲覧）

金子一夫（1992）『近代日本美術教育の研究―明治時代―』中央公論美術出版.

金子一夫（1999）『近代日本美術教育の研究—明治・大正時代—』中央公論美術出版.
向野康江（2022a）「「罫画」教科書となった『西画指南』の内容分析（1）—原書 *The Illustrated London Drawing-Book (1853)*との照合—」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』71, pp.187-205.
向野康江（2022a）「「罫画」教科書となった『西画指南』の内容分析（2）—原書 *The Illustrated London Drawing-Book (1853)*との照合—」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』71, pp.207-224.
向野康江（2022a）「「罫画」教科書となった『西画指南』の内容分析（3）—原書 *The Illustrated London Drawing-Book (1853)*との照合—」『茨城大学教育学部紀要（教育科学）』71, pp.125-239.
向野康江（2022d）「「罫画」教科書としての『西画指南』—序文・凡例・原著書翻訳を通しての考察—」『美術教育学研究』54, pp.113-120. 大学美術教育学会
田野村忠温（2023）『近代日中新語の諸相』和泉書院.
張春陽（2023）『新漢語成立史の研究』ひつじ書房.
角田真弓（2017）「明治期の図学教育」『図学研究』51, pp.92-99.
原正敏（1968）「停点に関する覚書」『図学研究』2, pp.21-25.
原正敏（1969）「黎明期の図学教育」『図学研究』3, pp.45-65.

参考資料（いずれも 2024 年 02 月 19 日最終閲覧）

川上寛『西画指南』上,文部省,明 4. https://dl.ndl.go.jp/pid/851004／同『西画指南』下,文部省,明 4. https://dl.ndl.go.jp/pid/851005／同『西画指南』後篇上,文部省,明 8. https://dl.ndl.go.jp/pid/851006／同『西画指南』後篇下,文部省,明 8. https://dl.ndl.go.jp/pid/851007／同 『西画指南』後篇図,文部省,明 8. https://dl.ndl.go.jp/pid/851008／賢理ほか『舎密開宗 内篇 1-18 外篇 1-3』[2],須原屋伊八,天保 8-弘化 4 刊. https://dl.ndl.go.jp/pid/2556256／同『舎密開宗 内篇 1-18 外篇 1-3』[3],須原屋伊八,天保 8-弘化 4 刊. https://dl.ndl.go.jp/pid/2556257／廣瀬元恭『理学提要 3 巻首 1 巻』[1],天王寺屋市郎兵衛ほか,安政 3. https://dl.ndl.go.jp/pid/2555285／黒田行元『小学教授線形図解』,華井聚文堂,明 8.5. https://dl.ndl.go.jp/pid/828682／東京社『東洋學藝雑誌』(29),東京社,明 17.02. https://dl.ndl.go.jp/pid/3558987／抱独英『日講紀聞』巻 4-6 原生科 飲食消化篇,大学東校,明 3. https://dl.ndl.go.jp/pid/833353／超然ほか『裁断申明書信順記』巻下,水原慈音,明 16.3. https://dl.ndl.go.jp/pid/820750／渡六之助『法普戰争誌畧 8 巻』[7],須原屋茂兵衛,明治 4. https://dl.ndl.go.jp/pid/2591096 以上「国立国会図書館デジタルコレクション」による／『日本国語大辞典』（第二版）（Japan Knowledge による）／馬禮遜(R. Morrison), *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts; Part the third, consisting of English and Chinese.* 1822 年（近代史数位資料庫英華字典資料庫 https://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/ による）

（おくやま　ひかる　大学院人文社会系研究科　博士課程 1 年）